

女商一代 ①

幼商編

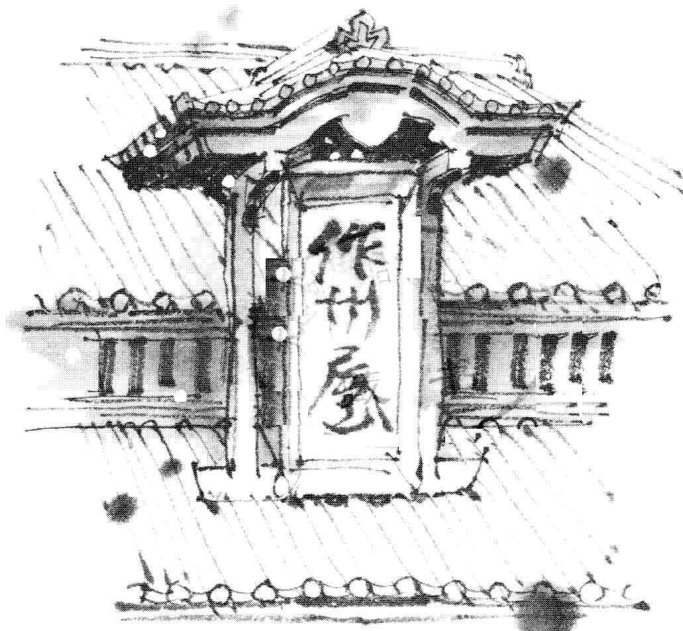


花登 筐

一代 ①

幼商編

花登筐



女商一代 ① 幼商編

880円

昭和54年12月10日 第1版第1刷発行

著 者 花 登 筐

発行人 真 野 金 蔵

発行所 ス ポ ニ チ 出 版

(スポーツニッポン新聞社出版局)

〒100 東京都千代田区一ツ橋 1-1-1

電 話 (03) 214-1700

印刷 東京ベル印刷

製本 大口製本印刷

© K. Hanato 1979

0093-1662-3718

女商一代① 幼商編

装
幀
成
瀨
数
富

「ほき」という女

強い木枯らしが船場の夜の道を直線に吹き抜けた。

荒谷剛三郎はその風を庇ひさしの下へ避けて身震いする。

午前一時、朝の早い船場では丁稚小僧一人とて歩いていない。

剛三郎は、ゆっくりとその暗い道を見廻す。

どの店の住人ももう今頃は眠りこけているだろう。

（やれ！ 剛三郎！）

例え、金でなくともよい。台所には飯の一杯ぐらいはあるだろう。

剛三郎は目の前に湯気の立った飯と汁を思い浮かべると唾を飲み込んだ。昨日の朝、芋を一切れ喰くっただけの剛三郎である。

不意にがたと音がして、剛三郎はぎくりとして懐の匕首かきくを握りしめた。

しかし、それは庇に吊った看板が風に吹かれて立てた音であった。

（恐れることはない。俺はまだ何もしていないのだ）

だが、それだけでも剛三郎の腋の下に汗が滲んでいることを知ると、

（俺も落ちたものだ）

と呟いた。

（元武士の俺が、風音におびえている……。どうせ落ちた俺ならば落ちついでにやるか）

荒谷剛三郎は、こうして決意した。

盗みをやることである。いや、夜になってこの界限へ現れたのは、その目的であった。

たとえ五厘、十厘の金でも手に入れねば飢えて倒れる剛三郎であった。

明治維新後、漸く治安が治まったかのように見えたが、元幕府方の武士達が職もなく徒党を組み押し込み、強盗を働いている噂は耳にする。

いや、そうせざるを得ない運命に立たされていることをいやでも知らされていた剛三郎であった。

しかし、剛三郎は耐えるだけ耐えたのは、やはり自戒のせいであった。

しかし、これ以上は耐えられなかった。

そして、この船場へ足を向かせたのである。この町には裕福なる商家が軒を並べていることは知っていた。

剛三郎はたった一本の匕首を売らずによかったことに気付いていた。何度か食いものに換えようとした匕首であった。

だが、野宿には欠かせざる武器だったからである。

だがである。もしその匕首を使わねばならぬ時は盗っ人ではなく強盗になることも知っていた。

死罪――。

旧幕府の武士が強盗を働けばその罪が一層厳しくなることも知っていた。

だが、剛三郎は椀一杯の飯への誘惑には勝てなかった。

剛三郎は、よろけるように歩いた。戸締まり厳重な表戸からは恐び込めぬことぐらいは知っていた。

剛三郎は通りを横切る小道のところで足を停めた。

その辻にある四軒の角店にはその横道に沿ってそれぞれ塀も裏木戸もある。そこから忍び込もうと考えたのである。

剛三郎はその四軒を見た。どの店がどれだけ用心をしているか、どれだけの住人が居るかも知っちゃいなかった。と言って昼間、探りを入れておけばよかったとは思ひもなかったのは、この決意がそれだけ衝動的であつたのである。

剛三郎は今立っている店の軒のれんを見ると即座にそこと決めた。

作州屋——なる屋号が読めたからである。

作州津山、それは荒谷剛三郎の故郷であつたからである。

本来ならば人間はこんな時、故郷の名のある店はむしろ避けるかも知れない。

しかし、剛三郎がとつさにそこへ忍び込もうと決めたのは、作州屋とあるからには同じ故郷の人間の営む店であらうし、同郷人なら剛三郎の所業を理解してくれるかも知れぬと思つたからである。

剛三郎の父、荒谷剛之助は津山十萬石松平藩に代々仕える二百石取りの武士であつた。

王政復古の幕末、徳川慶喜が恭順の意を表するや、津山藩もそれに従つたが、新政府の大蔵大輔である井上馨は松平家が徳川親藩であるとの理由で容赦なく廃城処分を決定した。

たつた一夜にして生計の道を閉ざされた旧藩士達に再生の道はなく、父剛之助は裏庭を畑にして飢えをしのぐ術を考えたが、三男坊の剛三郎は一人で生きていかねばならず、職を捜して播州へ出た。

だが、薩長の新政府のみならず庶民達の旧徳川派の元武士達への風当たりが厳しかったのは、新政府が打ち出した士農工商の区別排除が徳川幕府の長年の庄政に従わされて来た町人や農民達の恨

みを一挙に吐き出させた為であろう。

喰うに喰えず川並人足の仕事にも加わった剛三郎であったが、元徳川系の武士らしいとわかると即座に仕事を追われた。

そして、転々として大阪へ流れて来た剛三郎に向けられる白い眼は変わらなかった。いや、かつて豊臣の居城であった大阪に住む大阪人は、むしろ太閤秀吉に対する親しみを抱いても、その豊臣を下した徳川家への反感は元からあった為か、元徳川藩士となると露骨に憎悪を向けた。そして、いつか野宿や残飯あさがりが続く野良犬となってしまうた剛三郎であった。

今、剛三郎が作州屋なる屋号を見て理解してくれると考えたのは、真っ先に恭順の意を表明した津山藩であるのに廃城処分とされ、津山なる地名も北条県なる名に変えた苛酷な新政府に対し、町人達も怒りを持ち、元藩士達に同情を多分に見せてくれたからである。

剛三郎は暗い小路を塀に沿って進んだ。

忍び込むなら、なるべく通から離れたところが良いと思ったからである。

作州屋の塀は長く向こうの通りまで伸びているようであった。

中程まで行くと裏木戸があった。その木戸は荷物を運ぶ大八車を出し入れする為かなり広く、木戸の中扉に更にくぐり戸があった。

剛三郎はかじかむ手でそのくぐり戸についてある把手とってに触れると、何とくぐり戸が開くではないか。

(無用心な……)

剛三郎は瞬間そう思いながら、そのくぐり戸から中へ入っていた。

闇に慣れた剛三郎の眼にそこが裏庭であるらしいことがわかり、大きい土蔵は荷物蔵か、その前

に大八車が五、六台整然と並べられてあつた。

そしてその反対側に母屋らしい建物が黒々と聳えて見えた。いや作州屋はそれ程堂々とした建物であつたのである。

剛三郎は気配を探りながらも、足の震えを感じていた。

作州を出てから何度か危機に逢つたことがある。たつた一個の握り飯の為に江戸から来た同じ元幕府方の武士と凄まじい撲り合いの争いまでやつた剛三郎である。

だが、盗みに入るといふ経験はなく、やはり足が竦んだ。

(とに角、入口を見つけねばならぬ)

剛三郎が自分に言い聞かせて建物に近付いた時だった。

背後に話し声が急に聞こえて、剛三郎は思わず井戸端に身を隠した。

すると、その裏木戸のくぐり戸がぼっと明るくなり提灯が現れたのである。

やがて、その提灯を持った手代風の男が姿を現し、

「旦那様、お足許が危のうございます」

と声をかけると、かなり恰幅のよい初老の男が姿を見せた。

旦那さんと呼ばれたところを見ると、この作州屋の主人であるらしい。

剛三郎はその幸運に喜びながら井戸端で出来るだけ身体を小さくした。

二人はその井戸端を通して母屋へ進んだが、母屋の裏の出口は意外に近くにあるらしく、

「お前は寝てよろし……。わしは庭から行く」

「それではお送ります」

「いや、提灯だけでええ」

そんな話のはっきり聞けると、今度は庭の方が明るくなった。

剛三郎は、手代が入って母屋の戸が閉まる音を聞くと、素早くその庭へ足を向けていた。

出来ることなら、その主人が建物に入る前に捕らえて懐中の金を奪いたかったからである。

だが、この家に慣れぬ分一足遅れたようであった。

夜眼にも立派な庭へ入ると、縁の雨戸が音を立てて開けられ、主人が草履を脱いで上がりかけていた。

かくてはならじと剛三郎は急いで縁へ行くと匕首を抜き、閉じられようとする雨戸を片手で押えながら縁へ上がった。

「おい……」

と雨戸を閉じようとしていた主人に匕首を突きつけたつもりが、何と主人ではなく女だったのである。

寝巻着の上から羽織を羽織ってかなり肥ったその中年女は主人の妻女であろうか突然の侵入者に啞然としていたが、剛三郎の手の匕首を見ると雨戸ががたと音を立てた。

女が雨戸の端を掴んだまま震え出したからである。

「おい……」

と剛三郎は匕首をしゃくり、雨戸の傍からその妻女を離しながら、些いささか計算の狂ったことを知った。

しかし、閉ざされている雨戸を開くには中から誰かが開けぬことには開かぬことに気が付かねばならなかったことを剛三郎は悔いたが、もう仕方がなかった。

この上は見つからぬ内に一刻も早くと、

「主人はどこじゃ……」

と聞いていた。

「は……はい……」

齒をがたがたと震わせて妻女が指さしたのは隣の部屋らしかった。

「案内いたせ」

恐怖で立つのも出来ぬらしく縁を這うようにして隣室の前へ来た妻女が障子を開けようとするのを見るや、剛三郎は足でその手を蹴り、自分が一気に障子を開けた。

「何や、騒がしい」

ランプの傍の火鉢に手を温めていた主人は、剛三郎を見てもぎょっともせずに静かに羽織の中に隠していた手を出した。

ぎょっとしたのは剛三郎の方で、主人の手に短筒があったからである。

「あんた、死にとうなかつたらその刃物、下へ落としなはれ」

このまま飛び込んでとも思ったし、これなら妻女を楯にするのだったとちなりと障子の方を見ると、何と妻女も火箸をつかんで睨んでいた。

剛三郎はいさぎよく匕首を下へ落とした。

すると妻女があつという間に近付いて来て、

「さっきはようも！」

剛三郎の向こう脛を火箸で思い切り撲ると匕首を拾っていた。

剛三郎はあまりの痛さに思わずそこへ尻餅をついた。

それを見た主人が、

「弱い押し込みや」

と声を立てて笑った。

「元侍か……」

主人はしゃがれ声だったが押しの強そうな声だった。

「で、狙いは何じゃ？」

剛三郎は向こう腰を撫ぜながらどうやって逃げようかと考えていた。かなり広い邸であるが、その割に人の気配は少ない様子であった。

するとである、剛三郎の心を見抜いたように、

「おまはん、この家に人が少ないと思てたら大間違いやで。ここんこやや治まったさかい見廻りはさせてんけど、用心の為に若い屈強なもんも三、四人は泊まってるし、番頭手代も二十人は居る。あの紐引っ張ったら立ちどころに集まって来よる」

嘘ではないらしい証拠に部屋の間、紫の房のついた紐が天井から下がっており、その下に妻女が居て、

「あんさん、呼びまひよか」

と紐に手をかけた。

「いや、待ち。誰に頼まれて来たのか確かめてからや」

すると妻女が、

「そんな確かめんでも、あのおせきに決まっています。あの女がわてらを殺させに来よったんだす」
殺させに来たと聞いて剛三郎は慌てて、

「違う！ わしは誰に頼まれたんでもない。ただ盗みに入り込んだだけじゃ」

と叫んでいた。

「盗みに？ この作州屋へ？」

主人は笑った。

「嘘も程々に言え。この作州屋へ盗みに入ったらどうなるか、知らぬ者はおるまい……。あのご維新のさ中だけでも、徒党を組んで忍び込んだ連中が七人、邸中にも入れず庭で銃で射たれて死にいった。以来、裏木戸を開けておいても盗人も近寄らぬ。さあ、誰に頼まれたかはつきりと言うた方が……」

主人は短銃をかまえた。

「いや、嘘ではない！」

剛三郎は手を抵げて待ったをかけた。

「わしはこの店がそんな店とは知らなかった。いや本当じゃ。昨日から何ひとつ喰いもしていぬので、金でなくても何か喰いものでもと盗みを決心してふらふらとこの町へやって来て、表からは入れそうにもないので四辻の塀のある家と思って……。それだけじゃ」

主人の眼がきらりと光った。

「四辻には家が四軒ある。現に向かいの店は三度襲われた。それだけ入り易い塀じゃそうじゃ。それじゃのに何でわざわざ作州屋を狙った」

「そ……それには理由がある……」

剛三郎の喉は緊張と恐怖で干からびて声を出すのも痛かった。

「実は、このわしは作州津山の元藩士で、同じ作州の出の者なら心情を解してもらえると思ったのじゃ……」

「心情を？」

主人は怪訝そうな顔をした。

「そうじゃ、廢城になった無念さを解して貰える……そう思ったのじゃ」

「それが盗みとどういふ繋がりがある？」

「いや……解してもらえば、わしらが何故こうまで落ち込んだかが……」

主人はちらりと妻女を見た。

「ふく、わかるか？」

「いいえ。あんさん、こんな男の言うことは嘘だす。この男はおせきから頼まれて」

妻女はおせきなる名前をまた出した。

「いや。おせきもこんなひもじい男には頼むまい……」

「そんならこの男……」

「ただの盗人らしいが、それにしても、ど厚かましい盗人じゃの」

盗人であるかわかったらしい主人を見て些かほっとしたが、ど厚かましいと言われて剛三郎は思わず主人を見た。

「そうじゃるうが。盗人というものは、いかに見つからぬように金品を盗み取ろうと考えるもの。じゃから忍びに入る前に糞を垂れるまじないまでして鵜の目鷹の目で隙のある家を狙い、それでも捕らえられたら観念をしよるのに、捕えられても助けてもらえる店じゃと考えて忍び込むとは……」

作州屋の主人は剛三郎の本音を見透かしていた。

「元侍というのは結構なこと考えるものじゃの。人がさんざんばら稼いだ金を横取りしようとして、見つかったら見つかったで今度は許してもらえようと手前勝手な算盤片手の盗みとは、それが

武家の商法とでも言うのかの。それにしてもど厚かましい。ところがどっこい世の中というのはそう甘うはない。この作州屋にしてもじゃ、先々代は作州から来てこの店を開いたらしいが、このわしは近江の百姓の伴での、先代に認められて入った婿養子で作州とは何のかかわり合いもないし、と言って近江から来た盗人だと言われても許すいわれもないし、また仮にもし許してみい、毎日のように近江出の盗人に狙われる。そんな算盤に合はんことはせんし、むしろ盗人を処分して、作州屋へ入れば危ないぞ、その場で殺されると言われた方が何ぼか得、違ふかの」

つくづくこの作州屋を選んだことを後悔した剛三郎に、主人は手の短銃をかざしておどして見せながら、

「それにしてもお前もど厚かましい上に愚かがつく。この船場でもいわれの金は一厘たりとも出さぬことで名高いこの作州屋へ忍び込んで、あたらしい生命を失う羽目になったのう」

主人は短銃を持ち直した。

剛三郎は射たれるのかと体を構えたが、主人はにやりと笑った。

「誰がお前をここで殺すもんか。血が流れて畳の替えだけでも大分の損。それに近頃、元徳川の侍連が何か企んでいる様子ですと番所へ訴えただけでもごほうびが貰えるという結構な世の中での、ましてや押し込みに入った元侍を捕らえたとあってはごほうびの金が頂けるのも確か。お蔭で金儲けをさせてもらえる。ありがたいことや……」

主人は嬉しそうに笑ってから、

「ふく、皆を呼べ」

と命じるのに、剛三郎はもう覚悟を決めたが待ったをかけた。

「願いがあつた。このわしをどこへ突き出そうと、どうしようとかまわん。じゃがその前に一つだけ

かなえさせてくれ。頼む、わしに何か喰いものを与えてくれ」

すると主人は、

「甘ったれるな！」

と怒鳴った。

「人間はの、自分の飯は自分で手に入れるもんじゃ。ところが侍という獣はの、ついこの間まで、刀という力で脅して飯を手に入れて来よった。わしら町人がせっせと働いて手に入れたものを。せめて最後くらい、稼がんけりゃひもじい思いをしないと泣きながら死んで行け」

ひややかにぞっとするような主人の言葉に剛三郎はもう何も言い返す気力はなく、ただ捕まってもすぐ断罪にはなるまい。だとしたら、もっそ飯ぐらいは喰えるかも知れぬと考えていた。

そこで主人がうなずくと妻女が紐を引っ張った。たちまち鳴子のような音が邸内に轟いて突然騒がしくなった。

その中に火のついたような赤ん坊の泣き声が交じっていた。すると突然、主人は妻女に、
「皆を止めろ！ 間違いだと言うのじゃ！」

と命じ、怪訝そうな顔をした妻女に何やら耳打ちした。

やがて妻女が出て行くと、

「船板一枚下は地獄というが……赤ん坊の泣き声で極楽が来そうじゃぞ」

主人はにやりと笑って、怪訝そうな顔の剛三郎に、

「お前に喰いものをくれてやる気になったのじゃ」

とまた笑った。

剛三郎は、この主人はからかっているのかとそっぽを向いていると、嘘ではなかった。妻女が飯